2019 年度　国語

［Ⅰ］次の文章を読み、後の問いに答えよ。

自分は現代の画家中に岸田君ほど明らかな「成長」を示している人を知らない。**コチョウ**(1)でなく岸田君は一作ごとにその美を深めて行く。ことにこの四、五年は我々を瞠目(どうもく)せしめるような突破を年ごとに見せている。そうしてこの成長、突破が年ごとに迫り行くところは、ただ偉大な古典的作品にのみ見られる無限の深さ、底知れぬ神秘感、**崇高**(ア)な気品、清朗な自由、**荘重**(イ)な落ちつきである。自分は正直に白状するが去年美術院の展覧会で初めてルノアルの原画を見たときにも、岸田君の不思議に美しい「毛糸肩掛(かたかけ)せる麗子像」を見た時ほどは動かされなかった。

が、自分はここで岸田君の画を**ヒヒョウ**(2)しようとするのではない。ただ、君の近著の『芸術観』について一、二の感想を語ろうとするのである。この論文集において岸田君は、優れたる画家であるとともにまた優れたる「**思索家**(ウ)」であることを示した。その思索は君の画と同じく深い**洞察**(エ)に充たされ、君の画と同じく不思議な生を**トラ**(3)えている。もとより自分はここに説かれた「思想」が岸田君の画の根柢（注：原文のままの表記「根底」に同じ）であるというのではない。岸田君の画の根柢は、君の語をかりて言えば、君自身の「内なる美」である。「精神」である。その「内なる美」「精神」が、線と色とをもってする表現手段によって現わされずに、―あるいはこの表現手段によって現わされ得ないものを持つゆえに―　**ガイ**(4)念と論理とをもってする他の表現手段によって現わされたとき、そこにこれらの思想が生まれたのである。だから我々はこれを、君の画と並んで存在する精神の表現と見なければならぬ。その意味でここには一人の画家の、画によって直接には現わされ得ないさまざまの優れた感情、信念、**洞察**(エ)などが伺われる。それは人としての岸田君の切実な**内生**(オ)を示すものである。が、同時にまた我々はこれを、製作家の書いた美学上の論文として、すなわち「製作の心理」を明らかにし得る可能の最も多い論文として、取り扱うこともできる。この意味でも自分はこれらの論文が深い暗示に富んだ価値の高いものであることを感ずる。それは美学者にとってよき反省の機会を与えるとともに、美術家にとっても力強い教示となるであろう。

岸田君の暗示に富んだ無数の観察を一々**ショウカイ**(5)することは容易でない。が、美術家としての岸田君の理想・信念は、君の生活の根本の力であり、また美術家にとって最も重要な問題であるゆえに、まずそれを取り上げてみようと思う。

画家としての岸田君の理想・信念には、「人として」の岸田君の本質的要求が投げ込まれている。我々はここに**キョウラク**(6)的浮浪人としての画家、**道義的**(カ)価値に無関心な**官能**(キ)の使徒としての画家を見ずして、人類への奉仕・真善美の樹立を人間最高の目的とする人類の使徒としての画家を見る。もとより画家である限り、その奉仕は「美」への奉仕に限られている。しかしこの画家は「美」への奉仕が、「真」への奉仕、「善」への奉仕とともに、真実の人類への奉仕であることを、そうしてそれが自己の任務づけられた、自己の**ブンタン**(7)し得る人類への奉仕であることを、明白に自覚している。この自覚を岸田君は切実なる内生の告白として表現しているのである。

美への奉仕はすなわち人類への奉仕である。言い換えれば、芸術のための芸術と人類のための芸術とは別物でない。この考えを深く裏づけるものは「人類(メンシュハイト)」の理念(イデエ)であるが、しかし岸田君はこの理念について詳しく語ってはいない。時には人類を地球上の人間の総体と考える。すると、「少数の人にしか深い美は見えないのなら、美が何で人類の喜びかと思いたくなる」という**カイギ**(8)が起こって来る。しかしこの**カイギ**(8)は**「人類」の意義が量から質に、物質から意味価値に移される**

とき、たちまちに脱却せられる。君は、一般の人にわかってもらえない淋しさが「美への奉仕」を理解することによって追い払われることを説く。「美術家は個人に奉仕するよりも、美に奉仕すればいいのだ。一般の人に通じると否とにかかわらず、ただ人類の美の事業に役に立つのか否かという事が大切なのだ」という。ここに「人類」は明らかに一つの理念として意味せられている。それはなお岸田君の「自然」の考え方によっても裏づけられる。自然はそれ自身には「心なき物質」である。価値なき存在である。ただ人間の「心」のみが「世界じゅうで盲目からさめた唯一の存在」であって、あらゆる価値はそこから生み出される。自然において人間が美を感ずるのは人間が自らの内にある美を自然物に投げかけるからである。すなわち自然の美とは、「無常無情の自然物と人間の心とが合致して生まれた暖かき子供」である。人は自然において美を感ずる瞬間に、すでに自ら「製作」しているのである。この考えを押し進めて行けば、同じ事が人間自身の肉体についても言えるであろう。肉体それ自身は自然物であって価値がない。その形、質量、などにおいて感ぜられる美しさは、人間の心の「製作」であって、肉体のものではない。さらに進んで美的価値以外の価値を問題とする時にも、同じ事は言えるであろう。しからば人間において感ぜられる一切の価値は、喜びも苦しみも悲しみも、すべて心の**ショサン**(9)であって自然のものではない。この考えをもって「人類」を意味づける時、それは初めて明白な内容を得るのである。動物学的に類別せられた「人類」は自然物であって、価値とは関係がない。が、我々が奉仕すべき対象としての「人類」は、「心なき物質」ではなくして、真善美の樹立をその事業とする大いなる「心」でなくてはならぬ。

自分は岸田君がこの事を感じて人類への奉仕を説いているように思う。理解なき徒輩(とはい)からしばしば空虚な言葉として受け取られている「人類」なるものは、理解ある人にとって切実なる現前の実在である。ただ人はこの実在を理解し得るために、空間的、物質的、数量的の考え方を捨てて、純粋な意味価値の世界を直視し得なくてはならぬ。そこには過去現在を通じて数限りのない人間がその生命を投入し、その精神をささげて実現に努力した大いなる「価値の体系」がある。それは我々の現前に輝き、我々が心をもって動く限り、我々を指導する。この価値の体系の創造者こそは「人類」である。それは真善美に分別せられ得るあらゆる価値を、欲し造り支持する。この人類の前にあっては、生物学的に意味せられた民族の別のごときは根本の問題ではない。我々がエジプトの彫刻に接して、その不思議な生きた感じに打たれるとき、我々は真実にエジプト人の血を受けるのである。我々が『イリアス』を読んでその雄渾清朗(ゆうこんせいろう)な美に打たれるとき、我々は真実にギリシア人の血を受けるのである。かくしてこそ我々は人類の内に生き人類の意志を意志とすることができるであろう。

「人類」がかくのごとき永遠にして現前せる創造者であるとすれば、我々が心をもってする一切の製作は、この人類の意志を現われしむることに**帰しなくてはならない**(ク)。人類への奉仕とは畢竟(ひっきょう)この意志の実現を我々の生の最高の目的とすることである。しからば真善美の創造を欲する人類の使徒として、美の王国を、美のための美を、芸術のための芸術を、創造しようとする努力は、**直ちに**(ケ)人類への奉仕でなくてはならない。

「芸術のための芸術」はかく解せられるときその最奥の意味を**ハッキ**(10)する。もしこの言葉が芸術家の**楽屋落ち**(コ)を弁護するために、すなわち「芸術家のための芸術」の意味において用いられるとすれば、それはこの言葉を真実に生かしているとは言えない。（後略）

出典：和辻哲郎「劉生画集及芸術観』について」『中央美術』1921 年（大正 10 年）4 月号
https://www.aozora.gr.jp/cards/001395/files/49876_45587.html

1. 本文中の下線部(1) ～ (10)のカタカナ表記に該当する漢字を下の順不同の漢字群を参考に、解答欄に記入せよ。

(1) コチョウ　(2) ヒヒョウ　(3) トラ　(4) ガイ　(5)ショウカイ
(6) キョウラク　(7) ブンタン　(8) カイギ　(9) ショサン　(10) ハッキ

漢字群

誇,	弧,	鼓,	帳,	張,	跳,	比,	被,	批,	表,	評,	票,	捕,	補,	促,	慨,	概,	既,	該,
招,	紹,	承,	召,	介,	会,	回,	協,	供,	共,	享,	洛,	楽,	落,	文,	分,	単,	担,	旦,
懐,	壊,	悔,	戒,	疑,	偽,	欺,	所,	処,	諸,	賛,	参,	産,	博,	拍,	発,	気,	起,	揮,

2. 本文中の二重下線部(ア) ～ (コ)の漢字部分の読み方をひらがなで解答欄に書き、各語句がこの文脈上で意味する内容をそれぞれ A～D より選び、その記号を解答欄の[　　]内に記入せよ。

(ア) 崇高
A. けだかく尊い　B. 見るものを圧倒する
C. 上品で洗練された　D. この上なく優秀である

(イ) 荘重
A. 伝統に根ざし落ち着いた　B. 身分の高さがうかがえる
C. 高貴で洗練された　D. おごそかで重々しい

(ウ) 思索家
A. 論理的に筋道をたてて考える人　B. 社会的な主義主張を持つ人
C. 確立した思想を持つ人　D. 人生の根本原理を論じる人

(エ) 洞察
A. 具体例から原則を導くこと　B. まだ知られていない事を推理すること
C. 物事の本質を見抜くこと　D. 推論を重ねて結論を導くこと

(オ) 内生
A. 建前ではない本音　B. 感情や考えが心の中に生じること
C. 自分でも気づかない感情　D. 内向的な生き方

（カ）道義的

A. 合理的で正しい　　B. 礼儀をつくした

C. 人が行うべき正しい道に沿った　　D. 善悪基準

（キ）官能

A.　エロチックな事柄　　B. 公的に支配する能力

C.　国家に奉仕する能力　　D. 感覚器官を通して得られる快さ

（ク）帰しなくてはならない

A. 属さなければならない　　B. 最終的にそうならなければならない

C. 目指さなければならない　　D. そこから始まらなければならない

（ケ）直ちに

A. 直接、じかに　　B. 時間をかけずに

C. 言い換えれば　　D. それまでの過ちを直して

（コ）楽屋落ち

A. 芸術家の制作中の失敗談　　B. 芸術家仲間の間での冗談

C. 芸術家の実際の姿　　D. 芸術家の間でだけわかること

3. 次の(a) ～ (e)の文章の内容が本文の内容と合致していれば○を、合致していない、あるいは言及されていない場合は×を解答欄に記入せよ。

(a) 筆者自身も画家であり、岸田君の成長を高く評価している。

(b) 筆者は岸田君の画は彼の思想の上に成り立っていると考えている。

(c) 画家の任務は人類への奉仕であると岸田君は自覚していると筆者は感じている。

(d) 少数の人にしか見えない深い美は人類の喜びにはならないと筆者は考えている。

(e)「芸術のための芸術」という言い回しは「芸術家のための芸術」という意味に使われることがあると筆者は指摘している。

4. 本文中の波線部に「『人類』の意義が量から質に、物質から意味価値に移されるとき、たちまちに脱却せられる」という表現があるが、「量から質に」「物質から意味価値」に意義が移された人類とは、どのような存在だと本文で述べられているのか、解答欄に記入せよ。

［Ⅱ］次の文章を読み、後の問いに答えよ。

町から、村へつづいている往来の片側に、イッケン(1)の小さなペンキ屋がありました。主人というのは、三十二、三の男であったが、毎日なにもせずに、ぶらぶらと日を送っていました。このあたりの商店は、一度、かけた看板は汚れて、よくわからなくなるまで、懸けておくのが例であって、めったに、新しくするということはなく、また、新しい店が、そうたくさんできて、看板をタノ(2)みにくるということもなかったのです。

「そんなことで、商売になりますかな。」といって、ペンキ屋のことを近所でうわさするものもありました。

それも、そのはずであって、いくら、地方の小さな町といっても、工場では、機械が運転をして、人々はせっせと働いていたし、またほかの商店では、一銭二銭と争って、生活のためには、血眼(ア)になっていたからでした。

ペンキ屋の主人の兵蔵は、ぶらぶらとして、自分の家の戸口を出たり、はいったりしていました。そして、ぼんやりとするときは、町の方をながめ、あるときは、村の方をながめて空想していました。　彼が、どんなことを頭の中に思っているか知った人はありません。ただ、彼がこうしているうちに、彼を除いて世の中は、せっせと駆け足をしていたのであります。

ある男は、一日のうちに、五円ばかりもうけました。ある男はこの一週間の中に、東京から、大阪の方までまわってきました。また町へ、旅から役者がきて芝居を打って去れば、その間には質屋の隠居(イ)が死に、指物屋(ウ)の娘は嫁にいったのであります。けれど、ペンキ屋の主人の生活には、変わりがありませんでした。

「兵さん、このごろは、どうですい。」と、聞くものがいると、兵蔵は、にやりと笑って(a)、

「あいかわらず、ヒマ(3)です。」と答えました。

女房は、質屋へ持ってゆく品物もつきて、子供のものまで持ってゆきました。

「なにか、ほかの商売をすればいいのに、ああ遊んでいては、困るのもあたりまえだ…。」と、近所のものは、見るに見かねて、ささやき合ったのです。

しかし、兵蔵は、あいかわらず、のんきそうに暮らしていました。ある日のこと、女房は、辛棒がしきれなくなったというふうで、「なにをそうぶらぶらして、毎日、考えているんですね。私たちは明日食べるお米がないじゃありませんか。」と、いいました。

「好きで遊んでいるんじゃない。仕事がないのだもの、しかたがない。」

彼は、こういって、ぶらぶらしていました。そして、日に、イクド(4)ということなく、戸口を出たり、はいったりしていました。

ある日のこと、町の菓子屋から使いがきて、店の看板を塗り換えるから、ひとつシュコウ(5)を凝らして、いいものを描いてくれとタノ(2)まれたのです。　その菓子屋というのは、町での老舗(エ)でありましたから、女房は喜んで、

「おまえさん、いいものを描いて、評判をとってくださいね。そうすれば、また、ほかの家でもタノ(2)みますから…。」と、いいました。

兵蔵は、にやりと笑った(b)だけで、答えませんでした。いよいよ町の菓子屋へ、仕事に出かけてゆくと、

「大将、きれいな女を描いてもらいたいと思うんだが、すてきな、美人を描いてくれないか。」と、菓子屋の番頭がいいました。
「美人ですか？」と、兵蔵は、問い返した。
「ああ、だれでも振り向いて見るようなのをな…。」と、番頭はいいました。
「文字も書くんでしょうね。」
「ああ、字も書かなければ、看板にならないが、まあ、絵のほうに力をいれてもらいたいのだ。」
　兵蔵は、しばらく、考えていましたが、ダマ(6)って、そのまま仕事にとりかかりました。家で、ルス(7)をしている女房は、せっかく、夫が仕事にありついたので、どうか、いいものを描いてきてくれればいい、それが人の目に止まって、評判になったら、また、ほかから頼みにくるだろう、そうすれば、いままでのように困ることもないと、ひたすら、心で祈っていました。
　また、近所のものは、兵蔵が、仕事に出かけたのを見て、
「珍しいことだ。」と、話をしていました。
　兵蔵は、いつに変わらぬのんきな顔つきをして、しきりに筆を動かして、いま女の頭から描きはじめたところです。町の問屋や、工場や、会社などでは、目まぐるしく、人たちが働いている間に彼は、鼻唄をうたいながら、さも楽しそうに、美人の姿を描いていました。番頭は、二、三度、家の外に出て、兵蔵の描いている看板をアオ(8)ぎましたが、いつまでも立って見ていずに、
「なるほどな。」といって、じきに店の内へ引っ込んでしまいました(c)。
　その日の晩方には、美しい女の立ち姿がみごとに描き上がりました。兵蔵は、はしごから降りて、しばらく道の上に立って、自分の描いた絵に見とれていました。
「ああ、よくできた。人好きのする顔だな。」と、いつしか、そばにきて立っていた番頭が、感心していったのであります。
　兵蔵は、仕事を終わって、道具を片づけて帰りかけた。そして店を出てから、もう一度自分の描いた看板を見返していたが、いつしか考え込んで、地面へクギ(9)づけにされたように、じっとして動かなかった。　彼は、なんと思ったものか(d)、また、絵の具を出して、はしごへ上りました。そして、しばらく筆を使っていましたが、やっと、それで満足したように、絵をながめて、はしごを降りると自分の家の方へ帰ってゆきました。そのときは、もう、あたりが、暗くなって、人の顔が、はっきりわからなかったのでした。
　翌日の朝、番頭は、外へ出て、ゆっくり看板を見ようとしてアオ(8)ぐと、あっ！と声をたて、驚きました。彼は、あわてて家へはいると、
「おい、みんな出てみな！」と、小僧たちにいって、騒ぎました。それも、そのはずのこと、看板の美人の頭に、一本の小さな角が生えていたからです。
「一晩の中に、角が、ひとりでに生えるわけはない。看板屋が、後から描いたにソウイ(10)ないが、なぜこんなことをしたのだろう。」と、番頭はいったのです。
「これから、看板屋へいって、呼んできて、描きかえさせなければならん…。」と、番頭は怒りました。
　このときまで番頭の後ろに立って、ものをいわずに、看板を見ていた、菓子屋の主人は、
「いや、描きかえさせなくていい。なかなかおもしろいと思う。きっと、この看板は、世間の評判になるだろう。」と、いいました。

はたして、この看板は、世間のうわさに上った。
「あれは、鬼を描いたんでしょう。」
「いや、あんな、美しい鬼というものは、ありませんよ。やはり、美人を描いたので、顔は、こんなに美しくても、心は、鬼だということを現したものでしょう……。」
「しかし、なかなかあの角は、**愛嬌**(オ)がありますね。」
「そう、あんな顔の、美しい鬼があれば悪くありませんな。」
　人々は、看板の絵を、さながら生きている人間を批評するように、とりどりにうわさをしたのでした。　いつのまにか、菓子屋の看板の美人は、この町の人たちの仲間入りをして、りっぱな存在になったのであります。
　村の人たちも、看板を目標に、道筋などを語るようになりました。しかし、これを描いた兵蔵は、それから転々して、どこへか移っていってしまった。いつしか、兵蔵のことは忘れられて、だれもいわなくなったけれど、彼の描いた、菓子屋の看板はその後長く、ものをいわない人間のごとく、生きていて、町の名物となっていました。

出典：小川未明「生きている看板」『早稲田文学』1927 年（昭和 2 年）11 月
https://www.aozora.gr.jp/cards/001475/files/53454_51932.html

1. 本文中の下線部(１)～(10)の語句についてカタカナ表記のものを漢字にして解答欄に書け。

(1) イッケン　(2) タノ　(3) ヒマ　(4) イクド　(5) シュコウ
(6) ダマ　(7) ルス　(8) アオ　(9) クギ　(10) ソウイ

2. 本文中の二重下線部(ア) ～ (オ)の漢字部分の読み方をひらがなで解答欄書き、各語句がこの文脈上で意味する内容を解答欄に記述せよ。

(ア) 血眼　(イ) 隠居　(ウ) 指物屋　(エ) 老舗　(オ) 愛嬌

3. 本文中の内容に関して、次の問の解答を解答欄に記述せよ。

(1) 波線部(a)で、商売について尋ねた人に兵蔵はなぜ「にやりと笑って」答えたと考えられるか。

(2) 波線部(b)で、喜ぶ女房に対して兵蔵はなぜ「にやりと笑った」と考えられるか。

(3) 波線部(c)で、番頭はなぜ、じきに店の内へ引っ込んでしまったと考えられるか。

(4) 波線部(d)で、「なんと思ったものか」とあるが、兵蔵は何を思って角を描き足したと考えられるか。

2019年度　一般選抜入学試験
国語　解答

［Ⅰ］

1.

(1) 誇張	(2) 批評	(3) 捕	(4) 概	(5) 紹介
(6) 享楽	(7) 分担	(8) 懐疑	(9) 所産	(10) 発揮

2.　（2×10）

(ア) 読み方 すうこう　意味 ［ A ］	(イ) 読み方 そうちょう　意味 ［ D ］	(ウ) 読み方 しさくか　意味 ［ A ］	(エ) 読み方 とうさつ・どうさつ　意味 ［ C ］
(オ) 読み方 ないせい　意味 ［ B ］	(カ) 読み方 どうぎてき　意味 ［ C ］	(キ) 読み方 かんのう　意味 ［ D ］	(ク) 読み方 き しなくてはならない　意味 ［ B ］
(ケ) 読み方 ただ ちに　意味 ［ B ］	(コ) 読み方 がくやおち　意味 ［ D ］		

3.

(a) ×	(b) ×	(c) ○	(d) ×	(e) ○

4.

動物学的に類別された自然物としての人類、「心なき物質」としての人類ではなく、真善美の樹立を事業とする大いなる「心」としての人類

真善美に分別されうるあらゆる価値を欲し、造り、支持する存在としての人類

（などに近似しておれば可）

［Ⅱ］

1.

(1) 一軒	(2) 頼	(3) 暇	(4) 幾度	(5) 趣向
(6) 黙	(7) 留守	(8) 仰	(9) 釘	(10) 相違

2.

(ア) 読み：ちまなこ 意味：一つのことに熱中して、必死に	(イ) 読み：いんきょ 意味：主に高齢で仕事から離れ、静かに暮らしている人	(ウ) 読み：さしものや 意味：板を組み合わせて作った家具や器具を制作販売する人
(エ) 読み：ろうほ・しにせ 意味：代々続いており、信用・格式のある店	(オ) 読み：あいきょう 意味：かわいらしくて憎めない様子	

3.

(1) わかりきった質問に対し、あんたは私に暇だと答えて欲しいのだね、と面白がっている。他
(2) それはおまえの希望だろ、そうはうまくいかないよ、と面白がっている。他
(3) 普通に描いてあればそれでよく、それ以上に関心がないから。他
(4) 普通に上手な絵ではなく、自分にしか描けない絵を描こうと思ったから。 普通に上手な絵なら、いつしか誰も気にかけなくなると思ったから。 普段看板の絵などに興味がない人々を驚かせてやろうと思ったから。　他